

当報告の内容は著者の著作物です。

第1回（通算第7回）基幹研究「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」公開セミナー

平成23年4月21日（木）15:00-18:00 AA研301号室

森林開発のグローバル化と地域社会
ーソロモン諸島の植林事業にみるブリコラージュ戦術ー
石森大知（AA研研究機関研究員）

地域社会の側に立脚してグローバル化を考察する場合、数あるグローバル化研究のなかでも、人類学的知見が有用である。誤解を恐れずにいえば、人類学者は地域社会の人々の主体性や創造性に注目することで、グローバル化による均質化ではなく、むしろ反動としての多様化に意味を見出してきた。それを端的に表すのが、グローバル化とローカル化を足してつくられた「グローカル化」の概念と思われる。グローカル化とは、グローバルな状況下でのローカルに根ざした適応を示す概念であり、それを土着知や伝統文化の持続や復興の表れとして称揚・賛美するような傾向が人類学で見受けられる。このような既存の議論において、グローカル化の概念はおもにつきの二点を含意する。一つは、均質化が進むと思われたグローバル状況下、その反動として（均質化のなかでも）多様化が生じているという視点。もう一つは、地域社会における土着知や伝統文化を駆使した主体的かつ創造的な取組みへの注目である。

たしかにグローカル化の概念は、中心と周辺の非対称性を際立たせ、権力関係の不均衡が渦巻くグローバル状況を生き抜く人々の動態を視野に入れるには重要な概念である。とくに人類学者が調査をおこなってきた地域は、グローバル化の流れの周辺部に近く、その影響も顕著にみられるだろう。しかし、この点を差し引いたとしても、従来的人类学者はグローバル状況下で生じる多様化を拡大解釈すると同時に、過度に多様性を強調してきたのではないかという疑問を払拭するには至らない。あるいは、ソロモン諸島の大規模森林伐採の事例に注目する本発表にひきつけていえば、森林資源をめぐる経済・技術・言説のグローバル状況下、地域社会の人々が実施する植林事業を、グローカル化現象として読み解くことに対する疑問である。

以上のような問題意識のもと、本発表では、ソロモン諸島ニュージョージア島のなかでも伐採が激しい北部地域、すなわち北ニュージョージアの事例を取り上げる。同地域は、火山島に特有の傾斜面と低地に豊かな熱帯雨林を有しており、それが島の人々の生活に恵みをもたらす一方で、貪欲な伐採業者にとっても垂涎的となってきた。それは森林資源のグローバル化を示す過程でもある。その後、北ニュージョージアの人々自身がおこなう植林事業の組織的な側面の概観とともに、ある村落での具体的な取り組みを報告する。これらの事例考察をとおして、グローバル状況下における地域社会の人々の動態に迫りつつ、最終的には、グローカル概念の有効性について批判的考察をおこなう。